

漫画『馬田行啓と小野光洋』

―教育に情熱を燃やした文教大学学園の創立者たち

第一章「創立者・馬田行啓

仏教学者としての学識とリーダーシップ」解説

一、弁論会のリーダー的存在

～福井県立武生中学校時代

一八八五（明治一八）年九月、馬田行啓は、福井県今立郡国高村に馬田茂羽右衛門の三男として誕生した。なお、国高村は現在の越前市に位置し、越前市は和紙、筆笥などモノづくりで有名な地域である。

幼い頃の名前は乙五郎であり、一八九五（明治二八）年に大阪府島上郡本澄寺において得度し、行啓日蓮と改名した。

その後、馬田は、福井県立武生中学校に進学する。中学時代の特筆すべきエピソードとして、弁論会の設置がある。統率力にすぐれた馬田が、生徒の個性の尊重や、話し合うことの大切さを生徒に説いていた（漫画本編一二ページ参照）。

中学時代の馬田について、王子保村誌刊行会『王子保村誌』（一九六二年）においては、次のような記述が確認できる。

在学中は学業優秀、加うるに謹厳な人となりと統率の天才はつとに認められて、常に級長として級を率い、特に五年の折は、風紀生を兼ねて全校生徒の善導に任じ、又その宛転玉を転ばす弁論は、やがて同校弁論会の創設を促し、その話術は他日師が宗教界に於ける活躍に重要な役割を果たしたのである（六九七～六九八ページ）

すなわち、馬田は、在籍当時より成績が優秀、なおかつ謹厳実直な性格であり、学内のリーダーとして一目置かれる存在であったのである。

少し難しい言葉で記述されているが、「宛転玉を転がす」すなわち、澁みなく非常に美しい声で、弁論部の部員を指導していたのであろう。

二、若き仏教研究者の誕生

～早稲田大学時代

一九〇五（明治三八）年三月、馬田は、福井県立武生中学校を卒業した（立正学園『馬田行啓先生追憶抄』一九五二年、一四ページ）。その後、馬田は、早稲田大学文学部哲学科に入学している。

馬田が入学した時期は、ちょうど教育制度が変化した時期であり、その変遷について簡単に紹介しておこう。一九〇二（明治三五）年九月に、私立学校令に基づき「東京専門学校」から「早稲田大学」と改称した（「早稲田大学」『国史大辞典』）。一九〇三年（明治三六）年三月に「専門学校令」（勅令第六一号）が公布されると、同法にもとづく大学に位置付けられた。なお、入学資格については、第五条に次のように規定されていた。

第一条 高等ノ學術技芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス

第五条 専門学校ノ入学資格ハ中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スルモノト檢セラレタル者以上ノ程度ニ於テ之ヲ定ムヘシ（後略）

第六条 専門学校ノ修業年限ハ三箇年以上トス

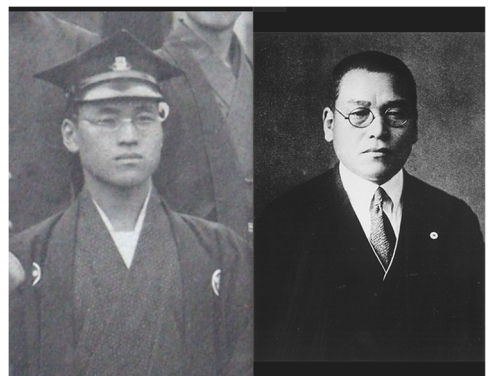
つまり、馬田が入学した時期の早稲田大学は、大学という名称ではあったが、教育制度上は専門学校であった。なお、一九〇八（明治四一）年



における学校系統図は、四ページ目を参照のこと。

一九一八（大正七）年一二月に「大学令」が公布されると、一九二〇（大正九）年二月には、早稲田大学は大学令に基づく大学に認可されたのである。

この写真は、一九〇九（明治四二）年五月四日に開催された「早稲田日蓮主義研究会予餞会」で撮影されたものである。予餞会とは、卒業生の送別会のことである。最前列の中央で杖を持つのが大隈重信総長であり、大隈の左後側に位置しているのが学生時代の馬田である（漫画本編一三ページ、下段の写真丸囲を参照）。



写真の比較

右 立正学園時代

左 早稲田大学時代

※集合写真を拡大したもの

出典：「早稲田日蓮主義研究会予餞会（大隈重信・高田早苗・東儀鉄笛と宇野即成・馬田行啓・竹下明次郎等学生達。於、大隈邸）、資料番号：B007-11

<https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subd%22:%22109%22,%22id%22:%2226593%22}&lang=jp>

一九〇九年七月に早稲田大学を卒業し、その後、早稲田大学宗教研究科に進学している。一九一〇（明治四三）年一〇月、研究論文「原始佛教の研究」を提出し宗教研究科を卒業した。修了後は早稲田大学に嘱託講師に迎えられ、若干二五歳にして研究者、教育者の道にすすむこととなる（前掲『馬田行啓先生追憶抄』、一四ページ）。

さらに、一九一七（大正六）年四月、早稲田大学出版部より『印度佛教史』を著した。この時、馬田は三二歳であり、気鋭の研究者として広く名前が知れ渡った。

そのため、同年七月には鉄道同友会からの依頼により、北海道を巡行し各地で講演をおこなっている。講演の依頼はとどまることなく佐渡や甲府に赴いた。『早稲田学報』には講演の詳細が記録され、一九一八（大

正七)年七月に新潟県佐渡郡において講演会を開いた。七日には河原田町(現・佐渡市)の妙経寺において「世界の佐渡」、翌八日には相川町小學校において「現代と宗教」と題し講演した。いずれも聴衆が千名を数える盛況であることを記事は伝えている。さらに、同年一〇月には山梨県甲府において「世界の大勢と日本仏教徒の使命」、「時代の趨勢と仏教」をテーマに登壇している。

このように、馬田は、二〇代後半～三〇代前半にかけて研究者としての地位を確立したほか、積極的に情報を発信することの重要性を確認し、学校教育への関心を次第に高めていくのであった(漫画本編二〇ページ参照)。



三 大学教員として教育活動

↳ 日蓮宗大学(立正大学)時代

馬田は、一九一二(明治四五)年四月に日蓮宗大学において嘱託講師として教鞭をふるった。さらに、一九一九(大正八)年一〇月には、日蓮宗大学の教授と中学部教頭に就任した。

日蓮宗大学時代における馬田の最大の業績は、大学昇格の中心的人物として尽力した点であろう。一九一八(大正七年)一月に「大学令」(勅令第三八八号)が公布され、これを契機に私立大学が誕生した。一九二〇(大正九)年には早稲田大学のほか慶應義塾大学、明治大学など八校が大学に昇格した。日蓮宗大学は、一九二四(大正一三)年に専門学校から大学に昇格を果たし、大学名を立正大学と改称した。この一連の動きにおいて中心的な役割を果たしたのが、ほかならぬ馬田であった。馬田は、校舎建築の監督、文部省への陳情のほかにも、時には当時の首相である清浦奎吾に直談判するなど、奮闘した(立正大学史編纂委員会編『立正大学の140年』立正大学学園、二〇一二年、二二ページ)。

大学昇格後も立正大学の教授として教鞭を取り、「仏教概論」「仏教史」などの講義を担当し、一九二九(昭和四)年までその職にあった。教授として教壇に立つほかに、一九一九(大正八)年一月には後述する日蓮宗大学社会問題研究会の会長に就任するのである。

次の第二章では、社会問題研究会に所属していた小野光洋が馬田と出会い、両者が力を合わせて女子教育機関、すなわち立正学園(現在の文教大学学園の前身)の設立に動き出すことが描かれています。詳細については、乞うご期待ください。

